尼崎市立歴史博物館第１６回企画展

戦後尼崎の映画・演劇

開催にあたって

本展では、戦後の尼崎の映画と演劇の歴史を紹介します。

第１章では、尼崎に所在した映画館・劇場の歴史を一部戦前も含めて紹介します。戦後復興期から昭和３０年代前半にかけて国民の最大の娯楽へと成長した映画が、昭和３０年代後半以降、テレビの普及等により低迷していく歴史は、そのまま尼崎の映画館・劇場数の変遷に反映されています。第１章では、尼崎における映画館・劇場の歴史を、当館職員の綿密な研究成果に基づき、網羅的に紹介します。

第２章では、昭和２８年（１９５３）に全尼崎映画連絡協議会として発足し、翌年に全尼崎労働者映画協議会(略称:尼労映）に改称した尼労映の活動について、当館と連携協定を締結している京都大学人文科学研究所が所蔵する「山本明コレクション」に含まれる尼労映関係資料も活用しながら紹介します。

第３章では、当館前身の尼崎市立文化財収蔵庫で撮影が行われた「ＡＬＷＡＹＳ三丁目の夕日’６４」「焼肉ドラゴン」の２本の映画と、尼崎が舞台となり尼崎市内各所でロケが行われ、昨年公開された映画「あまろっく」について、ポスターや小道具、ＰＲ映像等により紹介します。

第４章では、昭和２７年（１９５２）に尼崎市主催の尼崎市勤労者演劇競演会として第１回が開催され、昨年第７３回が開催された、国内最古級の市民演劇祭である尼崎市演劇祭の歩みを紹介します。

本展の開催にあたり、共催として多大なご協力をいただきました京都大学人文科学研究所様をはじめ、ご支援、ご協力いただきました全ての皆様に御礼申し上げます。

第１章　尼崎の映画館・劇場

尼崎初の映画館は大正９年（１９２０）に開設された栄倶楽部で、同年には平和館も開設されました。昭和になると小田村にも映画館が開設され、昭和１７年（１９４２）には１０館まで増加しましたが、終戦時には３館に減少しました。戦後復興から高度経済成長期にかけて映画館は急増し、昭和３３年（１９５８）には３７館まで増加し映画最盛期を迎えました。家庭にテレビが普及すると映画館は減少に転じ、一時は２館まで減少しましたが、平成２１年（２００９）にシネコンがＪＲ尼崎駅前に進出し、現在尼崎市内では３館の映画館が営業しています。

なお、本展開催に合わせて発行する当館紀要『地域史研究』第１２５号では、巻頭のグラビア特集で尼崎の劇場・映画館の広告媒体を中心に画像掲載し、本編では当館認証アーキビストの西村豪による論文「尼崎の劇場・映画館史」を掲載していますので、より詳しくは当館紀要をご覧ください。３階の地域研究史料室で販売しています。

▲香月劇場

現在の東難波町に所在した香月劇場は昭和２３年（１９４８）に映画館としてスタートし、昭和３１年（１９５６）にグランドシネマと改称、平成４年（１９９２）まで営業していました。

▲東洋劇場

現在の神田北通に所在した東洋劇場は昭和２６年（１９５１）に開館し、昭和２８年（１９５３）にはワイドスクリーンを設置しました。昭和３７年（１９６２）まで営業していました。

▲尼松（尼崎松竹）ポスター　昭和36年（1961）

現在の杭瀬北新町に所在した尼松（尼崎松竹）は、昭和5年（1930）開業のダンスパレスが昭和15年（1940）に閉鎖された後、映画館に転用され、昭和57年（1982）に閉館しました。

▲阪神東映・尼崎東映ポスター　昭和37年（1962）

阪神東映は阪神尼崎駅の南側に昭和32年（1957）、尼崎東映は現在の神田北通に有楽座として昭和30年（1955）に開館しました。有楽座は同年、尼崎東映と改称し、両館共に東映封切館となりました。

第2章　尼労映の活動

戦後、労働者の文化活動として映画サークル運動が盛んとなり、尼崎でも職域での映画サークルが多数設立されました。昭和25年（1950）には市内の各映画サークルが参加して尼崎映画サークル協議会が結成され、同協議会を中心として昭和28年（1953）に全尼崎映画連絡協議会が発足し、翌年に全尼崎労働者映画協議会（略称:尼労映）に改称しました（以後、時期を問わず「尼労映」と表記します）。尼労映では機関紙を発行し、作品紹介・批評や市内映画館の上映プログラム等を掲載し、会員への情報提供を行いました。また、提携映画館では会員証提示による鑑賞料金の割引を行い最盛時には会員数2万人を超えたといいます。戦後復興期から高度経済成長期に活動した尼労映について、当館と連携協定を締結している京都大学人文科学研究所所蔵資料等により紹介します。

二月目標、二千名

一月末現在は一二〇〇名

飛躍的發展をとげる尼映サ

最も大切な眞實へ

原保美（松竹俳優）の便り

京都映サ協へ到着

全尼崎映画連絡協議会機関紙　（特集号）　(2)

遂に結成される

全尼崎映画連絡協議会

第一回準備会開催

四月に役員改選

民主映画の

各地で好

◀尼崎映画新報（部分）▶

左は、尼崎映画サークル協議会の機関紙として発行され尼崎映画新報の第1号〔昭和26年（1951）2月発行〕。右は全尼崎映画連絡協議会発足により、同協議会の会報となった尼崎映画新報の特集号〔昭和28年（1953）2月発行〕

いずれも京都大学人文科学研究所所蔵・画像提供

▲尼崎映画製作ニュース（左）と完成した『鋼鉄の虹』のストーリー（右）

昭和２８年（１９５３）、尼崎の労働者の手により尼崎を舞台にした映画を製作しようという運動が起り、尼労映がその中心となりました。左は第１回シナリオ準備委員会が開催されたことを伝えるニュースです。その後、映画監督の家城巳代治や脚本家の鈴木正男、尼労映事務局長の北村英治らの協力により完成したのが右のシナリオです。しかし、同映画は結局、製作されることはありませんでした。
いずれも京都大学人文科学研究所所蔵・画像提供

第３章　尼崎でロケが行われた映画

昭和１３年（１９３８）竣工の尼崎市立高等女学校の校舎をリノベーションした尼崎市立歴史博物館では、前身の尼崎市立文化財収蔵庫時代に「ＡＬＷＡＹＳ三丁目の夕日’６４」と「焼肉ドラゴン」の２回、映画のロケが行われました。平成２４年（２０１２）公開の「ＡＬＷＡＹＳ三丁目の夕日’６４」では、建物の正面玄関が凡天堂病院の玄関という設定となり、当時はまだ残っていた中学校時代の音楽室が高校の音楽室という設定で撮影が行われました。また、平成３０年（２０１８）公開の「焼肉ドラゴン」では、正門が高校の正門という設定になり、当時はまだ残っていた中学校時代の教室や廊下、階段でも撮影が行われました。「焼肉ドラゴン」では尼崎の猪名川河川敷でも撮影が行われました。令和６年（２０２４）公開の映画「あまろっく」は、タイトルが尼崎閘門（通称尼ロック）に由来しているように、尼崎が舞台になった映画で、尼崎市内２０か所以上で撮影が行われました。

◀ＡＬＷＡＹＳ三丁目の夕日’６４の文化財収蔵庫でのロケセット

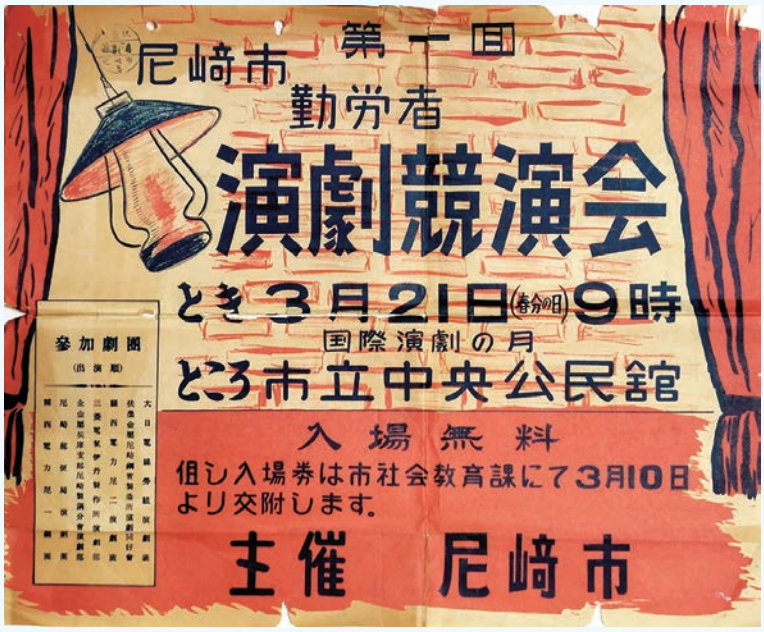
左は、玄関回りに設置された「凡天堂病院」のセットで、企画展では看板の実物を展示します。右は、旧音楽室に設置された高校の音楽室のセットで、鈴木オートの一人息子の一平率いるサンシャインブラザーズの演奏が行われました。企画展では、実物の貼り紙などを展示します。

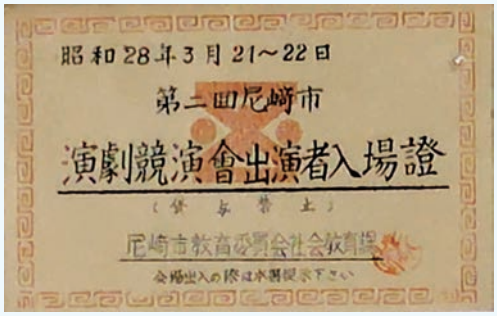
焼肉ドラゴンの文化財▶収蔵庫でのロケセット

左は、正門が高校の正門として撮影された際のセットで、「清光学院」の表札が入りました。右は英語の授業と保護者面談のシーンが撮影された旧教室です。現在、歴史博物館にはガイダンス室として使用している旧教室が残っていますが、その教室とは違う教室です。

第４章　尼崎市演劇祭の歩み

戦後、労働者の文化活動として尼崎では演劇も盛んとなり、昭和２７年（１９５２）３月２１日に尼崎市立中央公民館を会場に、尼崎市主催による第１回尼崎市勤労者演劇競演会が開催され、尼崎市内の企業等から７団体が出演しました。以後、競演会は毎年開催され、昭和３１年（１９５６）開催の第５回から会場は尼崎市立文化会館に移りました。昭和４７年（１９７２）には競演会出演団体等により尼崎市演劇連絡協議会が結成され、競演会は尼崎市と尼崎市演劇連絡協議会の共催による尼崎市演劇祭と改称し、会場も尼崎市立労働福祉会館に移りました。昭和５４年（１９７９）には兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）に移り、平成８年（１９９６）には尼崎市演劇連絡協議会が尼崎市舞台芸術協会に改称しました。尼崎市演劇祭は昨年第７３回を開催し、国内最古級の市民演劇祭としての歴史と伝統を継承しています。





▲第２回尼崎市演劇競演会出品者入場証
昭和２８年（１９５２）開催の第２回からは高校演劇部も参加し、尼崎市演劇競演会に改称されました。

◀第１回尼崎市勤労者演劇競演会ポスター
昭和２７年（１９５２）３月２１日に開催された尼崎市第１回勤労者演劇競演会のポスターです。尼崎市に社会教育課が設置されたのは昭和２２年（１９４７）、中央公民館が設置されたのは昭和２５年（１９５０）のことでした。

▲第１回尼崎市勤労者演劇競演会プログラム
尼崎市第１回勤労者演劇競演会では関西電力尼一発電所労組演劇班等の７団体が出演しました。

尼崎市立歴史博物館第１６回企画展　戦後尼崎の映画・演劇

編集・発行　尼崎市立歴史博物館　兵庫県尼崎市南城内１０番地の２　電話 06-6489-9801
発　行　日　令和8年（2026）1月10日

尼崎市文化財保存活用基金へのご寄附（ふるさと納税）にご協力ください。くわしくは →